

# むかわ町

■発災後1年の歩み

■あの時—私たちは④ (むかわ町関係者インタビュー)

# むかわ町 発災後1年の歩み

〔平成30(2018)年〕

- 9月6日・3時7分、胆振地方中東部でマグニチュード6・7の地震が発生（震度6強）
- 道内全域（約295万戸）が停電
- 3時40分、むかわ町災害対策本部を設置
- 不測の事態に備え沿岸地区（汐見・晴海）に避難を呼びかけ
- 全避難所開設、町内巡回を開始
- 非常用発電機による電力復旧（四季の館）
- 中心市街地を含めた多数の家屋が倒壊、消防へ救助要請
- 各家屋等の灯油タンクが転倒、復旧作業を開始
- 自治会、自主防災組織による安否確認を開始
- 陸上自衛隊リエゾンオフィサー（LO）が到着。以降、国土交通省TEC-FORCEをはじめ様々な関係機関等から応援を受ける
- 穂別地区3か所での土砂災害を確認（オビラルカ、富内、栄）
- 6時11分、地震発生（震度5弱 マグニチュード5・4）
- 災害救助法適用
- 町内小中高校の臨時休校が決定
- 町営バスの運行休止を決定

- JR日高線（苫小牧―鶴川間）が被災し不通
- 約1千戸の断水が発生
- 給水車等による給水支援開始
- 炊き出し等による食事の提供開始
- 支援物資の受入・提供開始
- 災害ごみの受け入れを開始
- 「デイサービスたんぼぼ」が福祉避難所として開設される
- 17時30分、気象庁が「平成30年北海道胆振東部地震」と命名
- 18時25分、穂別栄地区3世帯に避難勧告（9月12日に解除）
- 避難所13カ所、避難者1、033人
- 9月7日・穂別市街、豊田、和泉、栄、安住、富内の各地区の一部で断水発生
- 自衛隊に炊き出しと風呂の提供を要請
- 副町長が穂別地区避難所の訪問を実施
- 12時30分、穂別共和・明穂地区12世帯に避難勧告（9月22日に解除）
- 町長が鶴川地区避難所の訪問を実施
- 国によるプッシュ型支援の物資が到着
- 安住、富内市街地方面へ移動発電車による給電開始
- 鶴川地区の一部で電力復旧
- 9月8日・穂別地区の一部で電力復旧
- 自衛隊による炊き出しが開始される

● 自衛隊による入浴支援が開始される

9月9日 ● むかわ町フェイสบックによる災害関連の情報発信を開始

● 11時15分、二宮地区2世帯に避難勧告

● 17時05分、二宮地区2世帯に避難勧告から避難指示に変更（9月25日に解除）

● 18時50分、穂別キウス地区2世帯に避難勧告（9月16日に解除）

9月10日 ● 穂別地区での断水が一部解消

● 21時00分、胆振東部地震による犠牲者が全道で41名（厚真町36名、札幌市1名、苫小牧市2名、むかわ町1名、新ひだか町1名）に（北海道発表）

9月11日 ● 鵜川地区と穂別地区で再度停電発生、順次回復

● むかわ町災害ボランティアセンター活動開始に向けた情報発信、支援ニーズ調査を開始

9月12日 ● り災証明書交付申請の受付を開始

● 水道が全面復旧

● 鵜川高等学校が授業を再開

9月13日 ● 6時15分、福祉避難所が閉鎖

● 避難所8カ所、避難者267人

● むかわ町災害ボランティアセンター開設、受入開始



ボランティアによる炊き出し（9月17日）

9月14日 ● り災証明書交付に向けた家屋調査を開始

9月17日 ● 穂別地区で自衛隊による給水が終了

9月18日 ● 町内小中学校、穂別高校、認定こども園が再開

● 町営バスの運行が再開  
9月19日 ● 臨時FM局「むかわさ いがいエフエム」が開局

● 被災者生活再建支援法適用

9月20日 ● 鵜川地区での自衛隊による給水が終了

● 避難所4カ所、避難者170人

9月21日 ● 穂別地区での自衛隊による給食支援が終了

9月22日 ● 鵜川地区で「応急仮設住宅説明会」を開催

9月23日 ● 穂別地区で「応急仮設住宅説明会」を開催

9月25日 ● 応急仮設住宅建設開始、入居受付開始

● り災証明書の交付開始  
● 基礎支援金、加算支援金の受付開始  
● 「生活再建ハンドブック」を発行



生活支援ハンドブックの発行（9月25日）



小此木防災担当大臣の視察（9月19日）  
〔北海道新聞社提供〕

- 9時45分、二宮地区2世帯の避難指示を解除、これにより町内全ての避難指示・勧告が解消
- 9月26日・むかわ町出身のノーベル化学賞受賞者である北海道大学鈴木章名誉教授から町内小中高校に激励の色紙が贈呈
- 9月27日・北海道大学総合博物館の小林快次准教授（当時）が来町。国内最大の恐竜全身骨格化石「むかわ竜」が奇跡的に無傷であったことを確認、復興のシンボルへ活用に
- 9月28日・「激甚災害」指定の閣議決定
- 9月29日・家屋調査の2次調査が開始される
- 自衛隊による入浴支援が終了
- 9月30日・穂別博物館が再開
- 臨時FM局「むかわさいがいエフエム」が終了
- 災害ごみの受け入れを終了
- 10月2日・給食センターが給食提供を再開
- 10月6日・避難所1カ所、避難者66人
  - ・むかわ町復興推進プロジェクトチームを設置
- 10月12日・鵜川地区での自衛隊による給食支援が終了
- 10月13日・自衛隊給食支援終了セレモニーを開催
- 10月15日・被災家屋の公費解体・撤去申請受付開始
- 11月1日・応急仮設住宅入居開始  
（二期Ⅱ大原仮設団地）



応急仮設住宅への入居準備（11月1日）〔北海道新聞社提供〕

- 25戸）
  - 11月3日・四季の館内の各施設が再開（四季の湯、ホテル四季の風、まなびランド図書室等）
  - 復興イベント「鵜川ししゃもまつり」が開催される
  - 11月11日・復興イベント「むかわ竜完全版大公開」が開催される
  - 「四季の館」避難所を閉鎖
  - 11月13日・「報徳館」避難所を再設置
  - 11月15日・鵜川高校の生徒約50人が被災した商店街を勇気づける「ウォールペイント」を実施
  - 11月19日・被災し不通となっていたJR日高線（苫小牧―鵜川間）の再開セレモニーを実施
  - 11月29日・鵜川高校仮設生徒寮の建設を開始
  - 11月30日・被災家屋の公費解体・撤去を開始
  - 12月3日・義援金、被災家屋応急修理補助金の受付開始
  - 12月5日・応急仮設住宅入居開始（二期Ⅱ美幸仮設団地4戸）
    - ・り災証明書交付申請の受付を終了
  - 12月21日・町内すべての避難所を閉鎖
  - 12月27日・応急仮設住宅入居開始（三期Ⅱ美幸仮設団地6戸）
  - 12月27日・むかわ町復興推進プロジェクトチーム事務を統括する「むかわ町復興推進本部」を立ち上げる
- 〔平成31・令和元（2019）年〕**
- 1月31日・応急仮設住宅として鵜川高校仮設生徒寮が完成
  - ・むかわ町災害対策本部を廃止
  - 2月1日・り災証明書交付申請の第2次受付を開始

2月21日・21時22分、地震発生  
(震度5強 マグニ  
チュード5.8)

2月28日・仮設店舗完成

3月1日・仮設店舗入居開始

3月4日・復興計画策定に向けた  
復興基本方針を決定

3月6日・町長が仮設住宅全戸訪  
問を実施

3月17日・むかわ町復興支援訪問  
プロジェクトによる全戸訪問活動を開始

3月21日・被災し休館していた穂別地球体験館さよならイベント  
を実施

3月28日・鶴川地区で災害対策検証会を開催

3月31日・穂別地球体験館を閉館

・むかわ町災害ボランティアセンターを閉所

4月1日・むかわ町復興支援ネットワークを発足

・鶴川斎場が再開

4月3日・穂別図書館が再開

4月25日・穂別地区で災害対策検証会を開催

5月8日・鈴木直道知事が視察来町

5月9日・穂別地区で仮設住宅等町長懇談会を開催

5月10日・鶴川地区で仮設住宅等町長懇談会を開催

・仮設店舗グランドオープン記念式典を実施

6月1日・東京2020オリンピック聖火リレー北海道ルートに



応急仮設住宅への町長訪問(2月21日)

選出される

6月15日・洪水と地震を想定した道内最大規模の「鶴川・沙流川  
合同総合水防演習」を実施

6月23日・歌手の大黒摩季さんらによる復興支援コンサート「道  
産子SOULに火を付けろ」が開催される

6月29日・復興イベント「むかわ竜完全版大公開」が開催される

6月30日・被災家屋の解体実施を完了

7月13日・国立科学博物館(東京都上野)で恐竜博2019が開  
幕、復興のシンボルである「むかわ竜」を全国にお披  
露目(特別展過去最高の約679千人が来場)

7月31日・復興の道しるべである「むかわ町復興計画」を策定

9月6日・むかわ町防災訓練及び防災講演会を開催

・北海道大学総合博物館の小林快次教授が国内最大の恐  
竜全身骨格化石「むかわ竜」の学名「カムイサウル  
ス・ジャポニクス」を発表



「むかわ町復興計画」を策定(7月31日)



むかわ町復興計画町民説明会(8月21日)



建物被害 (鶴川地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 8 日撮影



建物被害 (鶴川地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



建物被害 (鶴川地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



建物被害 (鶴川地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



建物被害 (鶴川地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



建物被害 (鶴川地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 15 日撮影 [北海道新聞社提供]



建物被害(鶴川地区)  
平成30(2018)年9月8日撮影



建物被害(鶴川地区)  
平成30(2018)年9月6日撮影



建物被害(鶴川地区)  
平成30(2018)年9月6日撮影



建物被害(鶴川地区)  
平成30(2018)年9月7日撮影





建物被害(鷗川地区)  
平成30(2018)年9月28日撮影



建物被害(鷗川地区)  
平成30(2018)年9月7日撮影



建物被害(鷗川地区)  
平成30(2018)年9月6日撮影



建物被害(鷗川地区)  
平成30(2018)年9月6日撮影



建物被害(鷗川地区)  
平成30(2018)年9月7日撮影



JR 日高線 線路被害  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影 [北海道新聞社提供]



グラウンドネット支柱倒壊 (鶴川高校)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



灯油タンク倒壊 (鶴川地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



道路被害 (穂別地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



道路被害 (鶴川地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



建物被害 (穂別地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 20 日撮影



建物被害 (穂別小学校)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



建物被害 (穂別地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



建物被害 (穂別地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 10 日撮影



墓地被害 (穂別地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



山地被害 (穂別地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 17 日撮影



道路被害 (穂別地区)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



災害対策本部  
平成 30 (2018) 年 9 月 9 日撮影



災害対策本部長 (町長)  
平成 30 (2018) 年 10 月 1 日撮影 (北海道新聞社提供)



災害対策本部  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



り災申請受付  
平成 30 (2018) 年 9 月 12 日撮影 (北海道新聞社提供)



住宅被害調査  
平成 30 (2018) 年 9 月 14 日撮影



支援物資整理 (産業会館)  
平成 30 (2018) 年 9 月 18 日撮影 [北海道新聞社提供]



給水活動  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



支援物資整理 (ゲートボール場)  
平成 30 (2018) 年 9 月 20 日撮影 [北海道新聞社提供]



全国各地からの応援職員 (帰任時)  
平成 30 (2018) 年 10 月 7 日撮影



避難所 (鶴川中央小学校)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



避難所 (四季の館)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



避難所 (四季の館)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



避難所 (四季の館)  
平成 30 (2018) 年 9 月 10 日撮影 [北海道新聞社提供]



避難所 (穂別町民センター)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影



避難所 (穂別町民センター)  
平成 30 (2018) 年 9 月 16 日撮影



避難所 (穂別中学校)  
平成 30 (2018) 年 9 月 6 日撮影 [北海道新聞社提供]



避難所 (穂別町民センター)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



避難所炊き出し (穂別町民センター)  
平成 30 (2018) 年 9 月 7 日撮影



避難所炊き出し (鶴川中央小学校)  
平成 30 (2018) 年 9 月 8 日撮影 [北海道新聞社提供]



避難所炊き出し (穂別町民センター)  
平成 30 (2018) 年 10 月 5 日撮影 [北海道新聞社提供]



災害ボランティア活動(災害ごみ)  
平成 30 (2018) 年 9 月 15 日撮影 [北海道新聞社提供]



災害ボランティア活動(受付)  
平成 30 (2018) 年 9 月 25 日撮影  
[むかわ町災害ボランティアセンター提供]



災害ボランティア活動(受付)  
平成 30 (2018) 年 9 月 15 日撮影  
[むかわ町災害ボランティアセンター提供]



災害ボランティア活動(受付)  
平成 30 (2018) 年 9 月 25 日撮影 [むかわ町災害ボランティアセンター提供]





災害ボランティア活動  
平成 30 (2018) 年 11 月 4 日撮影  
〔むかわ町災害ボランティアセンター提供〕



災害ボランティア活動  
平成 30 (2018) 年 9 月 28 日撮影  
〔むかわ町災害ボランティアセンター提供〕



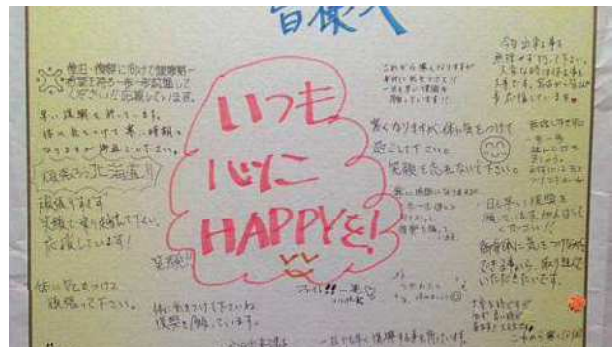
災害ボランティア活動 (災害ごみ)  
平成 30 (2018) 年 10 月 28 日撮影  
〔むかわ町災害ボランティアセンター提供〕



災害ボランティア活動 (災害ごみ)  
平成 30 (2018) 年 10 月 14 日撮影  
〔むかわ町災害ボランティアセンター提供〕



災害ボランティア活動 (穂別図書館復旧)  
平成 30 (2018) 年 11 月 29 日撮影  
〔むかわ町災害ボランティアセンター提供〕



災害ボランティア活動 (寄せ書き)  
平成 30 (2018) 年 12 月 27 日撮影  
〔むかわ町災害ボランティアセンター提供〕



災害ボランティア活動  
平成 30 (2018) 年 9 月 17 日撮影  
〔むかわ町災害ボランティアセンター提供〕



災害ボランティア活動  
平成 30 (2018) 年 9 月 15 日撮影  
〔むかわ町災害ボランティアセンター提供〕



応急仮設住宅  
平成 30 (2018) 年 10 月 20 日撮影



モバイルハウス  
平成 30 (2018) 年 11 月 26 日撮影 [北海道新聞社提供]



仮設店舗  
平成 31 (2019) 年 2 月 21 日撮影



仮設生徒寮  
令和元 (2019) 年 9 月 13 日撮影



奇跡的に被害がなかった「むかわ竜」を確認する北大小林教授  
平成30(2018)年9月27日撮影 [北海道新聞社提供]



復興イベント「鶴川ししゃもまつり」  
平成30(2018)年11月3日撮影 [北海道新聞社提供]



仮設店舗グランドオープン  
令和元(2019)年5月10日撮影



国内最大恐竜全身骨格化石「むかわ竜」の学名「カムイサウルス・ジャポニクス」を発表。復興のシンボルへ (恐竜博2019・東京都)  
令和元(2019)年9月6日撮影

## 震災を共に乗り越えた皆さんの底力を借りて これからも前に進んでいきたい

むかわ町長 竹中喜之



——発災当日の初動について伺います。

9月4日から5日にかけて台風21号が上陸し、警報が発令され、倒木などもありました。町内での程度の被害があったのかなど思っただけで寝た矢先のことでした。9月6日3時7分、寝ついたかと思っただけに地震が発生。疑問符と感嘆符が交錯し、「役場に走らないとだめだ」と、すぐに家

を出ました。

この町と命を守るんだ、そして守るためには現状の正確な把握が必要だと思いがら初動を起しました。むかわ町役場に到着すると、怪我をしていた職員もいました。次々と職員が集まり、3時40分に災害対策本部を立ち上げました。最初に頭をよぎったのは津波です。すぐに津波関係の情報収集。津波は来ないものの海面が多少は上がるという情報があったので、まず海に面した地域に避難を呼びかけました。5日前の9月1日に防災訓練を行っていたこともあり、避難所も迅速に立ち上げていきました。

そこから先は総動員で震災対応。矢継ぎ早に町内の被害報告が上がってくる緊迫感のある中で、ただ使命感を持って職員一同

と共に取り組んでいたのは覚えています。

——避難所が設置された翌日、町長自ら避難所を回って、避難者への声かけをされたそうですね？

本来ならば私が全避難所を回って、一人ひとりに声をかけるべきですが、そういう状況ではない。副町長が穂別地区で私が鶴川地区と分担し、すべてを回りました。

緊急時であり、いち早く現場を回ることに重要だと考えて、「とにかくご不便、苦労をおかけしますが、明けない夜というのはないですからね」と声をかけていきました。ふだんは元気な方たちが肩を落としていた姿が、今でも脳裏に残っています。

災害時の基本原則として、町民の皆さんへ正しい情報を速やかに発信していくと

もに、自らが先頭に立つことが重要だと思っ  
ています。そして、職員の皆さんもそれ  
について来てくれた。その一体感があつ  
てこそ乗り越えられた未曾有の大震災でし  
た。

——運営が難しいとされる福祉避難所を立  
ち上げて機能させたことは、全国的に  
も先進事例となりました。

現場が各緊急対応に迫られる中で、事業  
者と協力し、要介護者などの災害弱者を受  
け入れる「福祉避難所」の開設に至りまし  
た。あれもこれも行政が網羅できればいい  
んですが、被災している中、自分たちでど  
うやってこの急場をしのげるか。皆さんの  
底力を逆に私たちが学ばせていただきまし  
た。「自助」「共助」「公助」という言葉が  
ありますが、その「共助」の視点から立ち  
上がった「福祉避難所」。町民の皆さんの  
力を結集してできた全国でも先進的な事例  
になったと理解しています。

——ボランティアの力が復旧の大きな力と  
なりましたね。

今回の震災前にも、それぞれの町に「地

域防災計画」があったと思うんです。その  
中で「受援」については整理されていな  
かった。ボランティアセンターを通して支  
援に来てくれた方たちをどう分担して、ど  
う活用していくのか。この整理について非  
常に悩みました。物資の分配等も含め、今  
回の地震を受けて「受援力を意識した計  
画」というものも整備していくことの重要  
性を痛感しました。

避難所の運営もそうですが、継続性が重  
要。発災直後を乗り切ったあとの対応をど  
うするか。震災の教訓を活かす場面です。



緊迫した時間が続く災害対策本部

——町が取り組んでいる「恐竜化石を活か  
したまちづくり」が災害復旧の大きな  
支援になったと聞きました。

むかわ町は恐竜化石をまちづくりに活か  
してこうと、平成29（2017）年に設  
立された「にっぽん恐竜協議会」という自  
治体連携に参加しています。実はこの協議  
会では災害時の相互応援も盛り込んでいま  
した。お互いの魅力発信に向けて連携して  
いこうとした矢先に、最初に該当（被災）  
したのがむかわ町なんですよ。加盟してい  
た熊本県の御船町、兵庫県の丹波市、丹波  
篠山市に支援をいただきました。姉妹都市  
の富山県砺波市からもご支援をいただいで  
います。御船町は熊本地震で大きな被害を  
受けた町で、当時、復旧復興に向き合っ  
ている最中だったんですが、胆振東部地震が  
起きた直後に「今はむかわ」という合言葉  
で、震災対応の知見を持った職員がいち早  
く駆けつけ、避難所運営やり災証明書の発  
行など、ご指導をいただきました。全国各  
地からの応援派遣は、わからないことだら  
けの当時の状況で本町の職員の精神的な安  
心感にもつながりました。職員にとっては  
ピンチの時に駆けつけてきたヒーローのよ

うな存在だったとも聞いています。この学びは、我々にとっても大きな財産になったと思っています。

そして令和元（2019）年、宮城県の丸森町が台風で浸水被災した時に、今度はうちから職員を2名送り出しました。復興の途上であることを自覚しながらも「恩送り」として、支援をもらったむかわ町が今度は被災地を支援する側なんだという思いを持つての送り出しです。

—— 応急仮設住宅の面では、鷓川高校生徒寮を仮設住宅で建て、話題となりました。

応急仮設住宅などへの対応は、3町で連携して国や北海道に要望提案をしました。鷓川高校生徒寮は、全国初の寄宿舎タイプの仮設住宅となり、非常に感謝しています。被災した方々にどう寄り添っていかれるかという思いが一致したことで実現したんだと思います。

その仮設に入居する鷓川高校野球部の生徒自身も災害ボランティアを行うなど、地域が一体となりました。震災復旧が地域と子どもたちをより強くつなげた一面もあります。今（令和2年11月）の3年生は被

災時の1年生ですが、子どもたちはこの町の元気の源ですね。

また、おかげさまで災害公営住宅などの建設は当初の予定通りに進み、令和2（2020）年11月中に仮設住宅から転居することができました。鷓川高校の新寮も年内に完成します。被災した消防庁舎鷓川支署の移転改築についても工事が進んでいます。被災した方々の生活再建や、災害により強いまちづくりが進んでいるのを実感しています。

—— 「災害により強いまちづくり」は今後に向けた一つのキーワードですね。

消防庁舎鷓川支署の移転改築をはじめ、



ノーベル化学賞を受賞した北海道大学鈴木章名誉教授から町内小中高校に贈呈された激励色紙

震災で得た教訓を基に様々なことに取り組んでいます。町内外の団体や民間企業とも災害連携協定の締結を進めています。町内に車のテストコースを持ついすゞ北海道試験場とは、再建したいすゞ寮を避難所としても活用させていただく協定内容となっております。本当にありがたいことです。そして、近年の気候変動とともに昨今は日本海溝・千島海溝型巨大地震による津波も可能性として想定されているなど、被災を経験した町として災害により強いまちづくりをさらに進めていきます。

—— 復旧復興では3町の連携が大きな力になったと聞いていますが。

明治時代、3町は一つの戸長役場でした。言ってみれば兄弟の町なんです。今回、かなりの面積の森林が被害を受けましたが、3町の森林は一つの森林組合に一括されています。ここからここまですが厚真町だね、ここからここまですが安平町だね、と簡単に線が引けるものではないんです。

3町連携してここまで来れましたが、震災からの復興を遂げたとはまだ言える状況ではとてありません。被災地として先



3町長が連携して全国へ支援を呼びかけ（中央が竹中町長）

例的な取り組み、復興の姿を全国に示しながら埋没しないように、これからも連携して進めていかなければならないと思っています。

——令和元（2019）年7月に策定された「むかわ町復興計画」についてお聞かせください。

復興計画に最優先課題として掲げていた「住まいの再建」はおかげさまで果たせた

この2年間でした。しかし、被災した建物が解体され、空き地が目立っています。まだ仮設店舗などで営業をされている方もおり、震災により人口減少も加速している。次の課題は商業の活性化を含めた「まちなかの再生」です。今、住民の皆さんと検討会を立ち上げ、話し合いを進めています。鶴川と穂別、両地区のまちなかを再生させて、そして結ぶことができるか。また、恐竜化石といった地域資源をまちづくりにどう活かしていくか。まだまだ課題は山積みです。

そこに向かって町民の皆さん、そして町職員も含めて、これまでもらった支援を力に変えて、その力を一つひとつ形にしていきたい。創造的な復興の意味合いとして、元に戻すだけでなく、その先をしっかりと見据えた持続可能なまちづくりをしていく。要するにピンチをヒントにして、ヒントをチャンスに結びつける未来志向ですね。皆さんと共に進めていきます。

——最後に読者へメッセージをお願いします。

最悪が来ないことを強く願いながらも、

日常の防災・減災の備えを固めていくことが重要です。中島みゆきさんの『時代』という歌に「あんなこともあったねといつか笑って話せるでしょう」といった歌詞がありますが、笑って話せる時代をつくるためにも、皆さんの底力を集めて前に進んでいきたいですね。

まずはコロナ禍を乗り切り、今を体得の機会として捉え、前へと、復興へと向かう元気なまちの姿をお見せすることで、震災でご支援いただきました皆さんへ「ありがとうございます」の感謝を伝えてまいります。

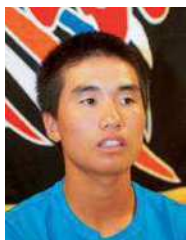


被災者を受け入れる住宅が完成し、鍵を交付

## 「感謝」から「行動」へ—— 野球やボランティア活動を通じて、 まちの力になりたい

——震災当日の様子を振り返ってください。

阿部 寮の部屋で寝ていましたが、地面から突き上げるような衝撃を受けて目覚



阿部 柁希さん

めました。激しい揺れを感じましたが、寝ぼけていたので何が起こっているのかわかりません。二段ベッドの上段から見下ろすと、一面に物が散乱していました。下段の寮生に「大丈夫か」と声をかけて無事を確認し、一緒に廊下に出ました。

見渡すと、ありとあらゆる物が倒れていて、地震の大きさを実感しました。みんな、怪我はなく、寮生34人全員無事でした。監督から「自宅に避難するように」と指示を受け、舎監から安否報告と同時に、迎えに来てもらえるよう家族に連絡をして

もらいました。

鬼海 私は管理者として寮にいました。いつもとは違うことが起こったとすぐわ



鬼海 将一さん

かるほど激しい揺れでした。寮の1階に寝ていましたが、ただ事ではないと感じて、寮生がいる2階や3階の様子を確認に行きました。散らばった物を踏んで怪我をしないように靴を履かせて、全員を1階に集めました。この時の一番の心配は津波でした。幸いにも「津波の心配はありません」と聞いてほっとしたことを鮮明に覚えています。

そして激しい揺れの約20分後、急に暗闇に包まれました。停電になりましたが、津波が来る恐れがなかったため、明るくなる

まで動かずに1階に集めた部員らと共に夜が明けるのを待ちました。明るくなって周りを見渡すと、寮の玄関ドアのガラスは割れ、食堂では米や食器が散乱。外に出ると、敷地は陥没していました。

停電で食事の用意すらできない状況となり、寮生活が困難になることはわかりましたので、その日のうちに保護者に連絡を取り、実家に避難させることを決めました。信号が消え、ガソリン確保も大変な中でしたが、家族に迎えに来てもらい、無事に全生徒を一時帰宅させることができました。

寮生を送り出したあと、私と舎監だけの数人で片付けられる状態でもありませんでしたから、そのままにして、野球部監督としてではなく、今度は町職員の立場として避難所の対応に向かいました。避難所で対



応していると様々な情報も集まります。ふだん練習をしている高校のグラウンドにも大きな被害があつて防球ネットがすべて倒壊し、町内のいたる所で家屋が倒壊していることを聞き、震災のすごさを痛感しました。その後、町内施設の復旧が進み、地域の住民やOBなど多くの方々のご協力を得て、寮の片付けや清掃を行ったおかげで寮も再開させることができ、学校の再開も決まりました。

——地震から1週間後の9月14日に秋季北海道大会の地区予選がありましたね。

鬼海 「こんな時に野球をやっているのか」という葛藤はありましたが、秋の大会は春の甲子園選抜の出場をかけた重要な大会であり、これを目指して毎日頑張ってきたので、ぜひ出場させてあげたいと思います。この気持ちをくみ取ってくれた多くの方々からの支援があり、出場することができたので、前向きな気持ちに切り替えました。大会運営側にも考慮いただき、日程を2日延期してもらい、試合に向けて2日間練習できる時間をいただきました。練習時間は1日2時間と限られていましたが、や



震災から約1年後に開催された2019年夏の全道大会

るべきことはやれたと思います。阿部 試合に負けたことは私たちの実力不足です。震災自体は野球に関係ありませんし、負けた理由を震災のせいにはしたくないと思っています。確かに野球をやれる状態ではなかったのですが、そんな中でも町の方々が応援してくれたので、大会に出場することができました。もちろん勝つこと

は大事ですが、自分たちが全力でプレイすることで少しでも町が元気になれば、という気持ちでした。鬼海 部員にはふだん通りにプレイすることを伝えていましたが、私自身、町がこのような状態で「さあ、試合だ」と頭を切り替えることは難しかったですね。それが負けた原因ではありませんが、部員の気持ちもふだん通りではなかったと思います。

阿部 試合は震災の1週間後でした。野球をやれる状況ではないのに、町の方々の応援を受けて野球をやらせてもらったことを本当に感謝しています。

鬼海 町の方々は野球部をわが子のように応援してくださいます。心強い最強のサポーターです。子どもたちがこのような環境で野球ができる町は、全国でもむかわ町だけだと思います。いつも感謝の気持ちでいっぱいです。

——大会終了後にボランティアを始めていますね。

阿部 試合が終わってから当時のキャプテンと「自分たちがやれることはないか」と話をしました。「今度は僕たちが町の方々



野球部伝統の「三気精神」を掲げた仮設生徒寮

の力になろう」と、ボランティアに参加することを決めました。

**鬼海** このボランティアは、部員の自発的行動であり、私は町職員として災害復旧に関わっていましたので、人手が必要な場所を聞いて彼らに紹介しました。

ボランティアを申し出ると、あちこちから声がかかりました。荷物運搬、片付け、

ポスティング、清掃活動、さらには農家での手伝い、そのほかシシャモ祭りなど町のイベントのお手伝いなど、ありとあらゆることをさせていただきました。

——大会が終わってからこれまでの生活はどうでしたか？

**阿部** しばらく寮に住んでいましたが、調査で建物が半壊状態だということがわかり、11月半ばに二宮地区の報徳館（旧小学校、現生涯学習センター）にみんなで移りました。被災して半壊となった寮を出て、いつもと違う環境での生活でしたが、それほど不安などはありませんでした。

農家の皆さんから米や野菜などを差し入れしてもらうなど、地域の人たちの温かさを感じました。

**鬼海** 寮母さんは報徳館の狭い厨房でも、これまでと同じように食事を作ってくれました。いつもとは違う環境になりましたが、みんなで食べ慣れた寮母さんのご飯を食べると、かつての寮生活に戻ったような気持ちになりました。これは大きかったですね。

被災した年の冬には仮設寮の完成を迎

え、冬休みを活用して12月末に持ち物だけを運び込んで、年が明けた15日の始業式に合わせて報徳館から仮設寮に移りました。

そして、野球部伝統の言葉を仮設寮に再び掲げました。「元気・本気・一気」です。大きな声であいさつする「元気」、全力疾走の「本気」、一気呵成の「一気」。これまでの野球部が掲げてきた信念を貫き、三気精神で様々なことに取り組みました。

——ボランティアを経験して、どのようなことが得られましたか？

**阿部** 本当に全国から支援の言葉や物資をいただきました。「感謝の気持ちは行動で示すしかない」と思っただけです。困っている人がいれば、その人の助けになろう。その精神をボランティアを通じて学びました。このことは、僕にとっても、チームとしても大きな学びだったと思います。

**鬼海** 自分たちをサポートしてくれるたくさんの人たちの姿を目の当たりにしたからこそ、彼らは「町のため」「支援してくれた人たちのため」と心から言えるんです。本当に大切なことを学んだと思います。



様々なボランティア活動を行う野球部員 (左：被災農家の復旧作業 右：被災店舗の清掃)

——指導者として胆振東部地震の経験から得られたことはありますか？

鬼海 部員は野球を通して、そしてボランティアを通して、たくさんの人と出会いました。町の方々は自分たちも被災し、厳しい状況なのに、彼らに「頑張つて」と温かい声援を送ってくれました。ボランティアに行けば「ありがとうございます」と素直に感謝の気持ちを表してくれます。そうしたことが子どもたちの心を動かし、彼らの自発性を促し、彼らを大きく成長させました。ありがとうと言われれば言われるほど、子どもたちの心はどんどん豊かになっていくものと気づきました。二度と経験したくない出来事ですが、震災を経験したからこそ理解できたことですし、失ったものばかりではないと思えました。

——最後に支援してくれた方々へメッセージをお願いします。

阿部 震災を通してたくさんの人に支えていただいたことを、心から感謝しています。この経験を活かし、人のために役立てる人になっていきたいと思えます。

鬼海 部員たちの成長のために多くの皆さま

んからご支援をいただき、ありがとうございます。彼らは震災の経験を活かし、どこかで困っている人がいれば、その人のために手を差し伸べることが出来る大人になってくれると思います。これからも本校野球部への応援をどうぞよろしくお願いたします。



約2年間を仮設生徒寮で共に過ごした野球部3年生一同

## 地域の総力を結集

# 日頃の訓練とつながりが有事の際の大きな力に

——発災直後の行動を教えてください。

三上 (穂別地区の)

自宅で大きな揺れを感じて、目を覚ましました。地震が収



三上 美津江さん

まって辺りを見渡すと、家じゅうに物が散乱していたので、怪我をしないよう靴を履いて今後に備えました。

前田 (鵜川地区の)

自宅で休んでいました。2階だったので激しく揺れました。



前田 嗣夫さん

その揺れが収まると、消防団員である息子夫婦が駆けつけてくれました。非常事態であり、家のことを妻に任せて出勤しようとなりましたが、同居している義母の様子が気になって部屋を覗いてみると、倒れたタン

スが顔を直撃する寸前で止まっています。これは被害者がたくさん出ていると感じ、義母を助けて息子夫婦に任せ、消防団詰所に急いで向かいました。

福田 (鵜川地区の)

自宅で眠っていました。地震が収まってから見渡すと、家



福田 隆二さん

じゅうがぐちゃぐちゃでした。子どもの頃の十勝沖地震を思い出すような揺れでしたが、今回の揺れのほうが大きく感じました。上下に飛び跳ねるような感じでしたね。津波を警戒していましたが、漁師をしている娘婿からの連絡で津波の危険はないことがわかり、自宅で待機して情報収集を始めました。

むかわ建設協会長  
福田 隆二さん  
鵜川消防団長  
前田 嗣夫さん  
穂別消防団女性部長  
三上 美津江さん

——長い一日が始まったわけですが、その後の活動をお聞かせください。

三上 昼過ぎにむかわ町役場に到着して、何をすべきか話し合いました。穂別消防団としても初めてのことで、何から始めてよいやら困惑しました。

女性部が炊き出しを担当することになり、早速準備にかかりました。すぐに自衛隊の給水車が到着して、水を供給してくれました。「冷蔵庫が壊れて保存できないから使って」と町内のスーパードから食材、農協から米の提供があり、各自治会から駆けつけていただいた方々と協力して、むかわ町役場に避難された方々に食事を提供しました。

前田 詰所に集まり、4分団に分かれ地域を回りました。町じゅう倒壊した建物だら

け。ブラックアウトの中で「この町はどうなってしまうのだろう」と不安な気持ちがかみ上げてきました。巡回をしている時、新聞販売店を営む団員の家が倒壊しているのを発見しました。本人の無事を確認して話を聞くと、ふだん寝ていた部屋がつぶれていたが新聞配達に出かけたことで九死に一生を得たそうです。

消防団の全車両を使用して、状況把握にも努めました。赤灯を見ると高齢者は安心するようで、団員に「灯油タンクが倒れたので何とかしてほしい」などの声がかかりましたので、建設協会と共に復旧作業を進めていきました。巡回を行っている中で、高齢者が非常にショックを受けているのを目の当たりにしました。声かけパトロールを行うことはできましたが、非常時であったため、心のケアまでしつかりとできなかったことを反省しています。

**福田** 待機しているとすぐにむかわ町役場から「協会員（各会社）に連絡を取ってほしい」と依頼がありました。震災復旧業務を行うことは協会として想定していなかったのですが、復旧対応に従事できる会社を片っ端から集めて、町災害対策

本部の指示に従って協会員に動員をかけていきました。

協会の中には国や北海道の要請を受けて町外の復旧に当たっている会社もありますので、全員を動員するのは困難です。対応可能な会社の人たちと一緒に道路に出来た段差を解消するために土のうを運んだり、倒れた灯油タンクを起こす作業などを行いました。脚が折れて自立しないタンクも多く、4〜5班に分かれ、4日ほどかけて500基くらいは処理したと思います。寒くなる前の時期であり、早朝の大地震であったため、各家庭でストーブやコンロなどを使っていなかったのが幸いしましたが、倒壊した灯油タンクから灯油が漏れていた話を聞いた時はぞっとしました。建物倒壊が起こったうえに、さらに火災が発生することがなくて本当に良かったです。

——消防団は前日まで台風21号を警戒していたそうですね。

**前田** いつ災害が発生するかわからない状況だったため、幹部に待機命令を出していました。台風を警戒して待機していたことが功を奏して、震災対応の初動の早さにつ

なりました。

——二次災害防止のためにどのような取り組みが行われましたか？

**福田** マンホールが浮き上がって車の走行に支障が出ていたので、砂利を敷いて段差を少なくするなど、危険な箇所を確認しながら応急処置をしました。穂別地区では林道がダメージを受け、河川の護岸ブロック



土砂崩れで埋まった穂別地区の道路

が倒れるなどの被害を確認しました。土砂崩れが発生しそうな場所はブルーシートで覆いました。作業に当たる者には充分に注意するよう伝えていましたが、危険と隣り合わせの作業だったと思います。

**前田** 二次災害防止と言えるのかわかりませんが、地震発生後は避難しているお宅を狙った空き巣が出現するため、町外からたくさんの方の警察官が応援にきました。土地勘がなく効率的にパトロールができませんということから、対策本部を通して消防団に夜間パトロールが要請されました。夜中の0時から翌朝6時まで20日間にわたってパトロールを続けましたが、団員の全員がほかにも仕事を持っているため、負担を強いたと思います。かなり効果があったように、担当地域で盗難は一切ありませんでした。

——不確かな噂やデマなどもあったそうですが。

**福田** 「厚真方面から山鳴りがするので再び地震が来る」という噂や「震度5の地震が発生すると、自衛隊や海上保安庁の人が言っているのを聞いた」というデマもあり

ました。むかわ町では下水処理場の排水管が外れたため、水中ポンプで水を流していましたが、その音に驚いた人が「沖で大きな音がしているから津波が来る」と言っている様子になり、実際に避難した人もいます。冷静に考えればわかるようなことですが、当時はそれだけ心に余裕がなかったのでしょうか。

——発災直後の緊急対応を乗り切ったあとは、災害ごみの処理が課題として浮き上がってきたそうですね。

**福田** 災害ごみとなる、倒壊した家屋や散乱した家財の処理をどうするかが話として上がりました。それらの受け入れ場所を早急に決めて、町やいすゞ（北海道試験場）と共に災害ごみの受け入れ、解体、分別作業に取りかかりました。関係者が連携して災害ごみを素早く受け入れることができ、迅速な復旧に貢献できたと思います。

このほかにも、倒壊しそうな家屋や店舗を重機で崩したり、土砂崩れの発生しそうな地域の応急対応を行ったりと、安全確保のために様々な活動を行いました。被災した家屋は崩れる恐れがありますが、個人の

財産でもあるため、むかわ町役場でも解体してよいか判断に迷ったようです。町は安全確保を最優先に解体することを決断し、すぐに作業に取りかかりました。協会からは、本業とは異なる作業のため苦労したと聞いています。



穂別市街の被災状況

——ふだんの訓練などは活かされましたか？

三上 突発的な事態でありながら思った以上にスムーズに対応できたと思います。私たちがやれることは限られています。今後何かが起こっても自信を持って対応できる気がします。

前田 震災で団員の誰もが家庭の心配や先々の不安を感じていたはずですが、そうした中でも、一つの目的に向かって集中できたのは、ふだんの訓練や交流の成果だと思います。

福田 大雨であれば事前に情報を得られずし、それに対して準備することもできませんが、さすがに震災の対策までは想定していませんでした。

——今後の課題などがあれば教えてください。

前田 ほかの町の消防団員の中には「うちの町では一度も災害が起きたことがない」などと自慢している人もいますが、どこで何が起こっても不思議ではない時代だと思います。今回の地震は深夜で、火を使う時間帯から外れていたため火災は発生しませんでした。

でしたが、大規模な火災が発生した時に消防団としてどこまで対応できるかは、今後の課題です。

福田 建設協会としては「防災意識を失わないように行政が主催する防災訓練に積極的に参加しよう」という話になりました。

また「灯油タンクを直しに行った協会員が周りから不審者のように思われた」という報告がありましたので、所属がわかるように建設協会のネームを入れた安全ベストを用意しました。

今後も地域に貢献していきたいと考えていますが、業界として高齢化・少子化により作業員を集めることが厳しくなっており、災害に備えることが年々難しくなっている実情もあります。

——最後にメッセージをお願いします。

三上 全国各地から義援金や支援物資など送っていただき、本当にありがとうございます。一町民として感謝の気持ちでいっぱいです。今後も地域を守る活動を続けていきたいと思っています。

前田 被災はしましたが、このむかわを明るい町にするために町民一人ひとりが手を

つないでいきたいと思っています。これからも頑張ります。

福田 全国各地からご支援いただき、感謝しております。震災は二度と発生してほしくないですが、もし何かあった時はみんなでまた乗り越えたいと思います。ご協力ありがとうございました。



倒壊して「危険」の赤紙が貼られた建物〔北海道新聞社提供〕

## 町が被害を受けている中で 会社の復旧だけを優先させるわけにいかない

——地震発生当日の状況を教えてください。

中島 私たち3人は  
苫小牧市に住んでお  
り、それぞれ自宅に  
いました。激しい揺



中島 繁則さん

れで飛び起きて、別の部屋に避難しました  
が、停電で何が起ったのかわかりません。  
私の自宅は物が倒れた程度の被害で済みま  
したが、むかわ町の甚大な被害を知って、  
業務を行うことは困難と判断し、緊急連絡  
網で従業員に出勤停止の連絡をしました。

森本 目を覚ました  
直後に地震が発生し  
ました。ニュースで  
震度6の大地震だっ  
たことを知りましたが、自宅があまり被害  
を受けなかったので、そのまま会社に向か



森本 直人さん

いました。途中で上司から「事務所内は壊  
滅的で、テストコースはアスファルトが盛  
り上がり、車が乗り上げている」と連絡を  
受けました。

中島 業務推進部長として対策本部を立ち  
上げる立場にありました。「出社可能な役  
職員だけでも会社を集まって対策を検討し  
よう」という話になり、むかわ町に向かっ  
たものの、信号機は止まり、道路には亀裂  
が生じて段差が出来きるなど、危険な状態  
でした。メールで通行可能な道路を連絡し  
合い、朝8時には主要メンバーが会社に集  
まりました。

テストコースや整備工場の被害は思った  
以上に大きかったので呆然とし、「このま  
ま(テストコースが)使えなくなるのでは  
ないか」という不安がよぎりました。比較

的被害が少なかった建屋の玄関ホールに机  
を並べて対策本部を設置し、これから何を  
すべきか話し合いました。

——最初に何をしましたか？

中島 まずは社員と家族の安否確認です。  
むかわ町市街地にあった社員寮には単身者  
29名と出張者34名がおりましたが、全員の  
無事を確認。朝10時までに従業員や家族に  
負傷者がいないことがわかり、胸をなで下  
ろしたことを鮮明に覚えています。

森本 寮に立ち寄ると、呆然とたたずむ従  
業員たちの姿が目に入りました。入ること  
がためらわれるほど内部の被害は大きいと  
言います。ここで生活を継続するのは困難  
と判断し、「注意して私物を持ち出すよう  
に」と告げました。若手社員には土地勘の

株式会社いすゞ北海道試験場  
取締役

中島 繁則さん

事業企画担当部長

佐野喜則さん

審査実験第一部 指導職

森本直人さん



ない出張者の対応を頼みました。

近くの鵜川中学校が避難所になっていることがわかり、全員で移動しました。寮からベッドマットや発電機など、使えるような物を残らず運び出し、ほかの避難者の皆さんにも使ってもらいました。会社からは「方針が決まるまで、そこで避難してほしい」と伝えられていました。

——親会社であるいすゞ自動車も支援に動いたそうですね。

佐野 いすゞ自動車では、東日本大震災を教訓に各工場ですべて支援物資を備蓄して



佐野 喜則さん

います。発災当日の9月6日、本社から支援物資を集めて送ると連絡がありました。いすゞのトラックを使っている運送会社の社長さんが心配し、自らトラックを運転して支援物資を工場まで届けてくれたこともあったそうです。

9月10日に中型トラック2台と大型トラック1台が到着しましたが、想像を超える量で、むかわ町役場の方と手分けをして避難所の倉庫に運びました。まだ支援物資

が本格的に届き始める前の対応だったので、とても感謝しています。

——いち早くボランティア活動に立ち上がりましたね。

森本 自宅待機を命じられていましたが、苦小牧在住者には被害を受けていない者が多く、今何をすればよいか、連絡を取り合っていました。これまでの災害を見てもボランティアが必要になることは明白でしたが、勝手に行動することはできません。そこで、「町で多数のボランティアを必要としているのであれば、私たちに協力させていただけませんか」と社長に申し入れました。

中島 会社としては、1週間の自宅待機のこと、会社の復旧作業に当たってもらう考えでした。一方で町の復旧にボランティアは必要です。「町が被害を受けている中で会社の復旧だけを優先させるわけにいかない」という判断になりました。

森本 町内に住んでいる従業員は家の損壊が大きく、すぐには業務に復帰できない。寮住まいの従業員たちは避難生活を続けており、作業に参加させることは困難。ボラ



膨大な災害ごみを連携して処理し、迅速な復旧に貢献(いすゞ北海道試験場社員とむかわ町職員一同)

ンティアはおもに苦小牧在住者で組織しましたが、会社の復旧作業を含め、人のやりくりが難しく、何をするにもぎりぎりの人数でした。

初めは個々がボランティア登録をして活動する予定でしたが、佐野から「会社としてまとまって組織的に活動をしたほうが役に立つかもしれない」と言われ、むかわ建設協会と合同で災害ごみの集積場を担当することになりました。

——災害ごみ集積場ではどんな活動をしたのですか？

森本 ボランティアは任意参加としましたが、慣れの必要な作業が多いため、数日連続して参加することを原則として、新しく参加した者に作業を引き継ぐことのできる体制を整えました。

佐野 弊社からは延べ222名、1日当たり20名前後がボランティアに参加しました。最初は自衛隊、後半は建設協会と合同で作業をしました。

森本 ごみの受付時間は8時45分から15時まで。15時を過ぎると、産業廃棄物処分業者が引き取りに来ます。業者ごとに焼却できるものが異なるので、どの業者が来て処理できるように、ごみは片っ端から解体し、分別しました。処理費用が発生する家電ごみは要員を配置して、持ち込んだ人

や型番を記録しました。

佐野 9月の3連休では、災害ごみの集積場となった運動公園から国道までトラックが連なり、交通誘導も行わなくてはならなかったのです、お昼を食べる暇さえありませんでした。

森本 仕事柄、解体作業や重機の扱いには慣れているんです。工具やヘルメットなども職場のものを持ち寄りました。ガラスを扱うにしても、どこを触れば安全か、普通の人よりふまえています。一般のボランティアには難しくても、私たちならばできることもありました。

——苦勞されたことは？

佐野 例えば、ベッドマットは分解して布とスプリングに分けることになっていきます。それでも、そのまま持ち込む人が跡を絶ちません。「お持ち帰りください」とは言えないので、こちらで対応せざるを得ませんでした。

森本 大量の段ボールや生ごみなど、震災と関係ないごみや、明らかに町外のごみを持ち込んでいるケースも見られました。一度受け取ると次々と持ち込まれるため、断



次々と運び込まれてくる災害ごみを分解、解体

固拒否しなければならぬ。中には食ってかかる人もいましたが、そうした行為は復旧の妨げにしかありません。違法なごみを受け取ると不法投棄を認めたことにもなりますので、そのような場合はきっちりとお

断りました。

——ボランティアとしていつまで活動されていたのでしょうか？

佐野 最初はボランティアの活動期間を定めていませんでした。震災から1週間ほど経過してごみの量が減ってきたため、9月



業務上の経験を活かした分解作業

30日までという期限を設けました。最後の駆け込みはすごかったですね。

——令和2（2020）年4月、社名を「株式会社ワーカム北海道」から現在の社名に変更したのも胆振東部地震が契機になったと聞きました。

中島 親会社であるいすゞ自動車から全面的な支援を受けたことでグループ会社としての認識がいつそう高まったことや、震災復旧を通して地域との結びつきを強く感じたことから、いすゞと北海道の地名を入れた社名とし、会社施設の復興を機に変更しました。

——被災後に再建された寮は避難所としての機能があるそうですね。

中島 震災時には、いすゞグループの従業員約60名が避難しました。感謝の気持ちとして再建した寮には、避難所として利用できる機能を持たせました。先般、むかわ町と寮の所有者であるいすゞ自動車、管理を担当する弊社の三者で防災協定を締結しましたが、震災がなければこうした機能を取り入れることはなかったと思います。

——最後に、むかわ町の皆さんへメッセージをお願いします。

佐野 私は町の剣道連盟に所属して、小学生に剣道を教えています。剣道を通して、これまで以上に人間形成のお手伝いをしたいと考えております。今後ともむかわ町のために頑張っていきたいと思っております。よろしくお祈りします。

森本 集積場のほかに、個人ボランティアとして住民の方々の被害状況の調査を担当しました。町民の協力により、スムーズに実施できたことを感謝しています。大きな町では難しい人とのつながりをたくさん感じました。今後も一緒に頑張っていきたいと思います。

中島 再建した弊社の寮は「むかわハウス」と名づけましたが、社内公募により「つながり」「絆」などを意味する「ネクサス（Nexus）」の愛称もつけました。震災によって弊社とむかわ町とのつながりを強く感じましたし、これからも絆を強く持つて、お互いに協力し合いたいと考えています。今後ともよろしくお祈りします。

## 力を結集して開設できた福祉避難所 災害弱者への24時間支援に向けて

医療法人資生会 高橋靖幸さん

——まずは「デイサービスたんぽぽ」の概要を教えてください。

札幌市に本部を置く医療法人社団誠医学会の事業所の一つで、鶴川地区を営業



高橋 靖幸さん

範囲として通所介護事業を行っています。定員は38人で、平均利用者は30人程度。要支援2から介護1の高齢者が利用し、全体の3〜4割を独居の方が占めています。

——震災当時は振り返ってください。

明け方に地面から突き上げるような揺れを感じて、目が覚めました。苫小牧市の集合住宅に住んでいましたが、上階から水が漏れてくるほどだったので、「ただ事ではない」と思いながら事業所に向かいました。

道中は信号が消えていて、道路がいたる所でひび割れ、いつもなら30分ほどで到着する道のりを1時間以上かけて事業所にたどり着きました。

——事業所はどのような状況でしたか？

併設する「四季の館」には、すでに避難された方がたくさん集まっていました。事業所の鍵を四季の館に預けているのですが、地震で散乱しており、なかなかキーボックスを見つけることができませんでした。

何とか事業所の鍵を見つけて状況が明らかになっていく中で、何よりも利用者さんの安否が気になりました。集まっていた職員3名と共に、怪我をした利用者さんがないか確認するために厚生病院へ向かいま

した。その途中で倒壊した利用者さんのお宅を見つきましたが、近寄ることもままありません。その光景を見て、ほかの利用者さんの様子がとても気になりました。

その後、職員間でSNSを活用し、避難所にいる利用者さんの状況を報告し合ったり、電話でご家庭の状況を確認するなど、安否確認に努めました。幸い、入院するような怪我を負った方は一人もおらず、安心しました。

——発災から約14時間後、迅速に福祉避難所を開設されていますね。

いったん自宅に戻った時に、町の災害対策本部から「デイサービスたんぽぽを福祉避難所として開放してもらえないだろうか」と打診を受けました。その前に別法人

である「デイサービス日和」から災害対策本部に「避難所での対応が困難な高齢者がいる」と報告があり、一般の避難所での生活が困難な方々を受け入れるための避難所である「福祉避難所」の開設が必要だと判断したそうです。早速、法人本部に報告したところ、了承が得られたので、デイサービスたんぼとデイサービス日和が協力して、発災当日の夕方に福祉避難所を開設しました。

町内の別施設が本来の福祉避難所として登録されていたのですが、停電や備品不足などにより、福祉避難所を開設できる状況にありませんでした。当事業所では四季の館の自家発電を使用することができましたし、立地も良く利便性が高いため、当事業所が福祉避難所の開設場所として選ばれたのだと思います。

開設後は、町の保健師が在宅の要介護者宅の巡回と、各避難所と連携した情報収集によって支援対象者の方を見つけて、福祉避難所への避難を誘導していったそうです。

### ——福祉避難所ではどのような活動をされたのですか？

家での生活が心配な独居の高齢者や、車いすを利用していることにより、避難所での生活が困難な方とそのご家族、合計18人（うち家族4人）の受け入れを行いました。布団などの用意は当事業所、食事の用意は食材のストックがあるデイサービス日和が、それぞれ分担して行いました。

最初は何から手をつければよいのかわかりませんでした。誰がどのように指揮を執るべきかでも戸惑いました。経験の長いデイサービス日和の相談員に生活面の指示を出してもらい、私は施設管理に当たるなど、それぞれ役割を持って活動しました。最初はまったく手探りの状態でした。

受け入れについても、むかわ町の担当者が心身の状況を客観的に判断して福祉避難所での受け入れを決定していましたが、明確な基準を設定していなかったために受け入れ時のトラブルも生じていました。

当事業所で働く町内在住の職員は、自宅が被害を受けているはずですが、初日から10人くらいが自発的に集まってくれました。福祉避難所として24時間体制が求めら

れるため、初日はたんぼと日和の職員が当直を担当しました。次の日に町内の「デイサービス楽らくはうす」にも協力を依頼してスタッフに加わってもらい、町内の3つのデイサービス事業所が協力して臨時の運営体制を構築しました。それから日勤をパート職員、夜勤を正規職員が担当し、日



福祉避難所が開設されたデイサービスたんぼ

勤で6名以上、夜勤で3〜4名を配置しました。3事業所が力を結集してできた体制であり、発災直後での事業所も大変な状況でしたが、幸いにも人が足りないと感じることはありませんでした。

——利用者さんとはどのように接しましたか？

「ふだんと同じようにデイサービスたんぽぽに通所している感じで過ごしましよ」とお伝えしました。このような状況なので体操などは行いませんでしたが、皆さんは音楽を聴いたり、おしゃべりをしたりして過ごしていました。今後のことを考えると気持ちが落ち込んでしまうので、明るい気分になるような声かけを意識しました。

——慣れない集団生活で避難している方から不満などは出ませんでしたか？

初日の夜間に「腰が痛くてここでは眠れないので、家に帰る」と言う避難者がいました。保健師につないで相談しましたが、やはりご自宅で過ごしたいとのことでした。避難が必要な状況でありながら、慣れない環境での不安から、ご自宅で過ごすこ

とを選択された方もいました。

——ふだん関わりがない高齢者への対応には苦労されたのではないですか？

この方はこの薬を必ず飲まなければならぬとか、夜中に物を食べる方がいるなど、一人ひとりを理解する難しさはありました。接しながら少しずつ理解を深めていきました。何度かDMAT（災害派遣医療チーム）に訪問してもらい、火傷や骨折の方を診察していただいたり、医療機関を受診するようアドバイスをいただきました。

——断水の中でトイレや入浴はどのように対応されていましたか？

断水のためにトイレの水が使えず、その都度、ペットボトルの水で汚物を流していました。また、デイサービスの浴室は四季の館の温泉水を利用していましたが、配管が壊れたので使えませんでした。

——福祉避難所は1週間の期限付きで設置されたと聞きましたが。

最初は設置期間を定めず「避難する人がいなくなるまで」としていました。利用者

さんは最大25人くらいまで増えましたが、ボランティアさんに自宅を片付けてもらい帰宅される方や、ほかの事業所のショートステイを利用される方、ご家族に引き取られる方など、徐々に避難者が減っていき、結果的に1週間で解散することができました。

震災後1週間というきわめて不安定な時期に、町内の避難所から災害弱者を集めて集中的に支援できる場所を設けられたことで、間接的にはかの避難所の安定的な運営につながったそうです。

疑問を持たずに必要に迫られてスタートしたことが、福祉避難所を円滑に運営できた要因だと思います。本部の命令で動く場合は、いちいち指示を仰ぐ必要があったり、現場とのずれが生じやすいのですが、今回は現場の判断を尊重してくれたことがスムーズな対応につながったと思います。

逆に言えば、今後災害が起きた場合、福祉避難所の開設が任意なのか義務なのかによって行動も変わってくるかもしれません。福祉避難所を開設している間、収益は一切ありませんでしたので、あらかじめ法人内で決めておかなければならないことも

多いと感じました。

私としては、ふだん話す機会がないほかの事業所のスタッフや役場の職員さんと会話や食事ができたこと、目的を一つにして連携できたことが新鮮でした。今後もこのように協力できる体制が構築できればいいと思います。



デイサービスたんぽぽに隣接する四季の館の様子(上：避難所受付 下：避難所内)

——福祉避難所の解散後は、通常のデイサービスを円滑に再開ができましたか？

たんぽぽは9月17日に再開しましたが、食事を委託していた業者が対応できない状態だったため、10月中旬まで四季の館で行われていた自衛隊などによる炊き出しを利用

用させていただきました。送迎中に余震に遭うなど、12月くらいまで落ち着かない日々を過ごしましたね。

——震災後に町と協定を結んだそうですね。

私たちを含む5つの事業者とむかわ町との間で協定を結びました。震災時に町と事業所が協力し合い、横断的に対応する内容になっていきます。今回の被災経験を活かし、これからの災害時に備えた支援体制の構築につながりました。

——最後に読者の皆さんへメッセージをお願いします。

この先、災害が発生しないことが一番良いことですが、残念ながら起らない保証はありません。再び災害が発生した場合は今回の経験を活かし、避難された方が不安を感じないように笑顔を絶やさず対応したいと思います。

これまでの経験を活かして

## 「福祉の視点」でまちの復旧復興をサポート

一般社団法人ウエルビーデザイン  
理事長

メディア・リレーションマネージャー 篠原辰二さん  
西村勇太さん

——一般社団法人ウエルビーデザインについて教えてください。

篠原 当法人は地域福祉の推進を図ることを目的として、様々な事業を展開しています。



篠原 辰二さん

私は当法人の理事長として現在活動していますが、これまで紋別市と新ひだか町で社会福祉協議会（社協）に14年間勤務してきました。社協の役割は地域の人々が住み慣れた町で安心して生活することができる「福祉のまちづくり」の実現です。東日本大震災を契機に地域コミュニティが重視される中で「市町村の垣根を越えた広域なコミュニティが必要なのではないか」と考えるようになりました。支援対象を日本全体

に広げることを目的に、平成24（2012）年に「一般社団法人ウエルビーデザイン」を設立。社会福祉分野でのコンサルティングや企画調査、研修講座の開催などの事業を行っています。災害復興支援事業はその中の一つとして位置づけています。

近年、大きな地震や水害が続発したことで災害からの復旧復興の大変さが知られるようになってきました。インフラの確保や備蓄品の調達など「モノ」に焦点が当てられることが多く、被災者のメンタルやヘルスケアなど「福祉の視点」での取り組みは不十分であると感じていました。それならば「自分たちでサポートできる体制を整えよう」と考え、災害復興支援を事業に取り入れました。

——どのような経緯でむかわ町を支援したのですか？

西村 厚真町の被害状況は連日報道されていましたが、むかわ町はメディアで触



西村 勇太さん

れられることが少ないため、支援の必要性が知られていないという課題を抱えていました。むかわ町はSNSを使った災害状況の発信やボランティア募集を行っており、それがマンパワー不足に拍車をかけていることに気づきました。

一方、私たちは平成28（2016）年の台風10号による南富良野町の水害への対応で情報発信を支援した経緯から、フェイスブック上に「北海道災害情報共有サイト」を立ち上げていました。





足湯とマッサージのサービスを受ける被災者  
〔一般社団法人ウェルビーデザイン提供〕

自治体がSNSなどに情報を発信することで得られるメリットがある一方で、手間がかかる、ダイレクトにクレームを受けるなど、デメリットも少なくありません。むかわ町に「私たちが入ることで町の負担が軽減できる」とお伝えし、ボランティアとして担当させていただきました。

### —— 情報発信以外にも様々な取り組みを行っているですね。

篠原 まず「情報共有会議」の運営支援があります。平成28（2016）年に大水災害のあった南富良野町では役場、社協、外部支援者で「情報共有会議」を行っていました。支援終了後も、次の災害に備えてNPOなど外部支援者が長期的に被災地で活動できる環境整備をNPO法人北海道NPOサポートセンターなどと共に2年かけて構築しました。この経験から、胆振東部地震でもNPOサポートセンターが開催する「情報共有会議」の運営支援を行いました。地震発生1週間で会議を開催し、迅速な対応をすることができました。これまでは自治体や社会福祉協議会が主体となり、外部支援者がそこに招かれる形でしたが、胆振東部地震では外部支援者主導で会議を開催できたことは大きな進歩です。

被災者に身近な活動としては、「北海道足湯隊」があります。震災直後から愛知県のNPO法人レスキューストックヤードが始めた支援を引き継いだものです。一つの団体に活動を担うのは負担が大きいですし、複数団体がばらばらに活動すると全体

像が見えなくなる。そこで13団体からなる「北海道足湯隊」を結成し、そのマネジメントを担当させていただきました。

足湯は、お湯に足を浸けてもらい、手をもみほぐす活動ですが、自然と震災当時の恐怖や生活の不安、身体や健康に関する「つぶやき」など気持ちを吐露していただける機会になっています。「つぶやき」からは被災者に対する支援の視点が見えてきますし、長期的に関わることで被災者のメンタルや環境の変化が見えてきます。これらの「つぶやき」は実際に支援をするうえでとても大事なものでした。

### —— 思い出の品の修復も行っているようですね。

西村 厚真町では被災者のアルバムのほか、眼鏡や鞆、時計の修復を行っており、むかわ町では図書館の資料の修復をボランティアとして行いました。アルバムの写真をデータにしてお返しするサービスを行っているのは、全国でも数少ない取り組みです。写真について汚れを落とす人、写真をデータ化する人、それを修正してきれいに復元する人など、たくさんのボランティア

によって、思い出の品が鮮やかによみがえりました。

——平成31（2019）年3月から始まった「むかわ町復興支援訪問プロジェクト」について教えてください。

西村 震災から2、3カ月が過ぎた頃、保健師さんから「仮設住宅に入居している

方、福祉サービスを受けている高齢者の状況は把握できるが、在宅の方、サービスを受けていない中高年の方の状況が把握できていない」という話を聞きました。その頃、私たちは広島県を拠点とする「NPO法人ピースウィンズ・ジャパン」と契約し、テレビなどの生活必需家電を被災者住宅に届ける支援を行っていました。設置や

利用状況を確認するために様々な被災者宅を訪問しますが、その時の経験から、私たちも町民の状況を広く把握する必要性を痛感していたのです。その思いを持ってむかわ町に全戸訪問を提案したところ快諾していただき、このプロジェクトの実施が決定しました。

町内全4、200世帯の現状把握に向けて、むかわ町、むかわ町社協、当法人の三者で「むかわ町復興支援訪問プロジェクト」を組織し、協力いただけるボランティアを募集し、全戸訪問を進めました。

平成31（2019）年3月末でのむかわ町災害ボランティアセンターの閉鎖が決定していたので、マンパワーが確保されているうちにと、3月17日に穂別地区から調査を開始しました。調査が始まってからは、調査票の作成、ボランティアさんのコーディネートやレクチャー、訪問する地域のマップ作成、収集した情報の整理、データ入力など、やらなくてはならないことが山積みでした。

——どのような方々がボランティアとして参加されていましたか？

篠原 様々な方にご協力いただきました。

## ～町内全4,000戸の現状把握に向けた～ むかわ町復興支援訪問プロジェクト



住民の“今”を見つめ  
必要な支援につなげる

8/23～26  
強化週間

**訪問ボランティア募集**

※18歳以上のボランティア保険加入者であれば資格や経験は問いません。

### 問い合わせ先

①活動内容に関するお問い合わせ

➔むかわ町社会福祉協議会  
0145-42-2467

②参加方法に関するお問い合わせ

➔一般社団法人ウェルビーデザイン  
info@wellbedesign.jp

エントリー方法  
活動詳細は次頁へ

ウェルビー デザイン

一般社団法人Wellbe Design

〒904-0022札幌市厚別区厚別南2丁目7番28号

TEL: 011-801-7450 (代表) http://www.wellbedesign.jp

訪問ボランティア募集のWeb サイト

訪問活動を始める前に札幌市内で「むかわ町の現状報告と支援活動参加のお願い」をNPO法人北海道NPOサポートセンターと共に開催しましたが、これに共感いただいた保険会社が社内でボランティアを募って参加してくれました。コミュニケーションに長けており、聞き取りもスムーズで助かりました。一般のボランティアさんや専門職など、44日間で延べ520人もの方々にご協力いただいております。

——訪問を通じてどのようなことがわかりましたか？

西村 事前に町や自治会を通して全戸訪問が行われることを周知してもらいましたが、アポイントメントは取っていません。不在のお宅もあり、再訪問しなくてはならないこともありました。都市部と違って地域コミュニティがしっかりしているためでしょう、訪問活動はスムーズでした。最終的に町内全4、200世帯中7割もの状況が確認できました。

ご自宅にうかがい、精神的な支援が必要な状況が見られた場合は、保健師さんに報告して訪問してもらい、り災証明や義援金

の申請に不備があった場合には、むかわ町役場に報告するなど、すぐに課題対応を行いました。

篠原 精神的に不安を抱えており、精神科医や臨床心理士の関与が必要な方はまだ多く見受けられます。地震がトラウマ（心的外傷）となり、明かりを点けたままでないと怖くて眠れないという方も、高齢者だけではなく子どもにも多いと聞いています。これらの訪問で明らかになった現状が、町で行う被災者への心のケアなどに活用されていくことと思います。保健師さんが把握している健康に関する情報とセットにして活用されるようになれば嬉しいですね。

——最後に胆振東部地震支援で感じた課題と今後に向けて準備すべきことを教えてください。

篠原 被災自治体は様々な寄付金、支援金が寄せられています。3町間に支援格差が生じていることが残念でした。限られた財源の中で復興しなくてはならず、被災された方のすべてに支援がしっかりと行き渡るわけではありません。今回は多くの団体が支援に入りましたが、支援方法の共有や

互いの支援内容に対する理解不足が生じ、様々な問題が浮き彫りになりました。自治体や社協の組織としての限界が被災者への支援の限界になってはいけないと考えています。今後の災害支援を考えるうえで、ボランティアや団体など、外部の支援を長く受け入れられる、それぞれの組織としての枠組みを超えた受援体制づくりが必要なのではないかと思っています。



穂別図書館の再開に向けて復旧作業を行ったボランティアの皆さん  
〔むかわ町災害ボランティアセンター提供〕

## 兵庫から持参したドローンで 災害査定業務をサポート

兵庫県丹波市くらしの安全課主幹  
兵庫県丹波篠山市経営企画課主査

柴原洋平さん  
石原卓人さん

——兵庫県から駆けつけていますが、むかわ町とのつながりを教えてください。

柴原 兵庫県の中央東部に位置する丹波市ですが、恐竜化石をきっかけとした自治体連携を全国で行っています。その恐竜連携協定を結んでいるむかわ町が被災したため、支援を行いました。

石原 丹波篠山市は同じく兵庫県の中央東部に位置しており、丹波市に隣接しています。丹波市や熊本県御船町、むかわ町の4自治体（発災時）で協定を結んでいたため、我々も応援に行きました。

——現地入りした時の状況を教えてください。  
柴原 第3陣として現地向かいました。むかわ町役場に到着すると、自衛隊、ボランティアセンター、報道機関、全国からの

応援などたくさんの方がいて、庁舎内が非常にあわただしい状況でした。竹中町長へ

着任報告に行った際には、私たち応援職員一人ひとりの手を握り、力を貸してほしいと力強く言われたことが印象的です。配属は穂別地区であり、再び移動して活動を開始しました。

石原 同じく第3陣として現地向かいました。車で移動しむかわ町に入ると、町のいたる所で建物の倒壊や道路のひび割れなどが見られ、被害の大きさを実感しました。現地はあわただしい状況ではありませんが、第3陣ということもあり、引き継ぎを受けてスムーズに活動に入ることができました。私も穂別地区で活動を開始しました。

——現地入りして、どのような業務を行いましたか？

柴原 災害査定を受ける被害現場、危険箇所、被災した町の様子などをドローンで空中撮影をしました。また、災害ごみの処理作業も行いました。

石原 期間の前半は、各地から届けられた支援物資の仕分けや、大量に運ばれ山積みになっていた家電ごみの分別を行いました。家電ごみの処理は体力がいる作業で、多くの人手が必要だと感じました。そして後半は、丹波市の方々が持参したドローンでの空撮作業の補助にも当たりました。

——むかわ町ではドローンをまだ活用していませんでした。どうですか？

柴原 実は、先発隊がドローンの活用を提

案したことがきっかけでした。平成26（2014）年の丹波市豪雨災害や平成30（2018）年の西日本豪雨の際には、ドローンを活用して災害情報を収集することがあります。同じようにむかわ町でも実施することになったので、現地に資材を持ち込みました。

——実際に現地でドローンを活用してみ  
いかがでしたか？

柴原 まったく土地勘がなく、計画的に撮影を進めることに苦慮しました。バッテリーの都合上、飛行時間も限られています。途中から同じく応援に来ている丹波篠山市の方々の力を借りて、現地誘導などを担っていただき、効率的に撮影を進めることができました。

石原 ドローンの操作はそれほど難しくはないものの、路上で撮影を行うにあたり、安全を確保するために両市派遣職員の4名態勢で臨みました。市街地の被害や山間部のがけ崩れなどの状況も空撮し、災害復旧に活用していただけそうなデータを取ることができたと思います。

——現地で活動するにあたってどのようなことを心がけましたか？

柴原 やはり、ドローン撮影時の安全確保ですね。万が一墜落して、人に怪我をさせたり家屋に損傷を与えることだけは絶対にないよう注意を払いました。

石原 住民の方へのケアももちろんですが、むかわ町の負担を少なくできるように心がけました。竹中町長をはじめ担当職員の皆さんがアットホームな雰囲気をつくっていただいたのが嬉しかったです。

——最後に、復興に向かうむかわ町へメッセージをお願いします。

柴原 私たちも平成26（2014）年の豪雨災害から、地域一体となって復興に取り組んできました。むかわ町もこれから復興に向けて、大変だと思えます。ですが、むかわ町にはほかにはない素晴らしい地域性や観光資源がたくさんあります。それらを大きな原動力にして復興を成し遂げられるよう心から応援しています。

石原 当時、どれだけお力になれたかわかりませんが、少しでもむかわ町の支援に携わることができて、嬉しく思います。滞在

時に感じた穂別の雄大な景色や博物館の様子、町職員の皆さんの温かさなどを、今でも鮮明に覚えています。震災から復興され、より発展されることを心から願っています。



第3陣で現地入りした兵庫県丹波市と丹波篠山市職員（左から2番目が柴原さん、右から2番目が石原さん）

# 支援を受けた恩返しとして

## 熊本地震の経験を還元

熊本県御船町商工観光課長

鶴野修一さん

——熊本県から駆けつけていますが、むかわ町とのつながりを教えてください。

兵庫県の丹波市や丹波篠山市と同じく、御船町も恐竜連携協定を結んでいました。むかわ町が被災したため、すぐに支援に向かいました。

——御船町は熊本地震で甚大な被害を受けた経験がありますが被災地に向かう時はどのような気持ちでしたか？

北海道の大地震をテレビで見ても、熊本地震当時を思い出し、体が震えました。町長から第一陣として派遣の指示があった時には、これまで応援を受けてきた側として恩返しをしたいと思います、使命感に燃えて現地に向かいましたが、飛行機が欠航して急ぎよ乗り継いだ青森からのフェリーの中で考える時間がふとできた時、熊本地震のことが記憶によみがえり、正直怖くなりました。

——被災自治体職員としての貴重な経験がありました。現地入りしてどのようなことをむかわ町に伝達しましたか？

現地入りしてすぐに行ったのは災害状況の把握と、これから必ず必要になる避難所運営、支援物資対応、災害ごみなどの災害業務のレクチャーでした。また、災害時には情報が錯綜するため、情報発信の重要性を伝え、災害情報が更新されていなかった町のHPと防災無線での情報発信を指導しました。

——最も貢献されたのはり災証明書の発行業務と聞きました。

り災証明の発行は、生活再建関連の支援を受ける際に必要になります。熊本地震当時の反省をふまえ、むかわ町ではスムーズに発行までの支援ができました。御船町でも行いましたが、関係課を横断的に調整するマネジメントチームの発足支援が効果的

であったと思います。

——最後に、復興に向かうむかわ町へメッセージをお願いします。

これからの復興への道のりは険しいものがあるかもしれませんが、御船町も復興途中ですので、恐竜が結んだ縁を大切に、手を取り合って共に復興への歩みを進めましょう。業務に当たる皆さんもお身体を大事にご自愛ください。



町職員にり災証明の発行業務を教える鶴野さん

# 姉妹都市の思いを胸に 町災害対策本部の運営を支援

富山県砺波市上下水道課長

菊池紀明さん

— 富山県から駆けつけていますが、むかわ町とのつながりを教えてください。

砺波市はチューリップで有名な町ですが、合併前の旧庄川町（現砺波市）と旧鷺川町（現むかわ町）が姉妹都市提携を結び、合併した今もその関係が続いております。その姉妹都市であるむかわ町が被災したため、すぐに応援に駆けつけました。

— どのような行程でむかわ町に向かいましたか？

飛行機が飛ばない恐れがあったので、発災の翌日にフェリーに乗り、その次の日にむかわ町入りしました。実は旧町時代の平成14（2002）年に姉妹都市提携で1年間派遣されたことがあり、まさかこんな形で再びむかわ町に来ることになるとは思ってもいませんでした。そのむかわ町がどうなっているのか不安な気持ちで8日夜にむ

かわ町役場に到着。執務室がぐちゃぐちゃで、職員は疲弊しており、胸が詰まる思いをしました。

— 現地入りして、どのような業務を行いましたか？

災害対策本部の運営支援をしました。錯綜している情報を整理し、インフラの被災状況や避難所状況、不足物品などを適切にホームページやSNSで発信し、報道機関にも随時情報提供をしました。むかわ町が早期に復旧するためには全国から支援をいただくことが必要であると思い、情報を発信し続けることに気をつけていました。また、先発隊の役割として、砺波市からの後発隊（保健師など）の受け入れ調整も行いました。



富山県砺波市の「むかわ町復興応援」マーク



災害対策本部運営支援を行う富山県砺波市職員（右が菊池さん）

— 最後に、復興に向かうむかわ町へメッセージをお願いします。

被災された方やむかわ町職員をはじめ、たくさんの方々が大変な苦勞をされてきたと思います。我々砺波市の応援職員は、ほんのわずかしお手伝いをする事ができませんでしたが、砺波にいる今もむかわ町の復興を心から願っております。

